

「なつかしさ」体験の諸特質に関する研究

玉井 瑛子¹・山田 圭二郎²・川崎 雅史³

¹正会員 (株) 三菱地所設計 (〒100-0005 東京都千代田区丸の内2-5-1, E-mail:eiko.tamai@mj-sekkei.com)

²正会員 博士 (工学) 京都大学大学院工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1, E-mail:kejirou.yamada.6w@kyoto-u.ac.jp)

³正会員 博士 (工学) 京都大学大学院工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1, E-mail:kawasaki.masashi.7u@kyoto-u.ac.jp)

近年の景観研究において、人の空間体験の質的把握が課題となっていると認識する。本研究では特に「なつかしさ」体験に着目し、なつかしさを感じるきっかけ、思い出す過去の体験、そのときの感情の動きのそれぞれについて、具体的なエピソードに基づき、それら諸体験に共通し、その核心に関わると思われる特質を明らかにする。具体的には、グループインタビューにより、「なつかしさ」体験に共通する諸特質を抽出した。次に、体験に共通する基本構図をモデル化して取り出すことを試みた。その結果、「なつかしさ」体験の前後で、その主観的経験下において、自己と他者及び空間との関係が自己を中心に変化していくことが説明された。これに基づき、「なつかしさ」体験の持つ人間的意味を総合的に考察した。

キーワード: なつかしさ、風景、空間、体験、感情

1. はじめに

(1) 背景

近年、都市機能の一極集中や都市部への人口集中によって、生まれ故郷を離れて暮らす人々が増えている。出身の異なる人々が共に生きる現代において、風景は予めの共通の関心事ではなく、荒廃していく可能性が高い。こうした状況の下、どのような空間が親しみの持てる場として共有されやすいのかを考察することは、今後の都市づくりにおける重要な課題であろう。

例えばボルノウは、人間が人間らしく生き生きと生きるためには、空間の中にただ投げ出されているだけではなく、自分を支え安心させてくれる空間が必要であると述べる¹⁾。自己形成期を過ごし、家族や知人の存在する生まれ故郷はまさにそのような性格を持っている。自己形成期に長く親しんできた故郷から離れてしまったとき、人はそういった空間を失うこととなる。しかしながら初めて行った場所でもなぜかなつかしく感じることもあるように、時に人は生まれ故郷以外の空間に対しても親しみを覚える。それは、故郷に良く似た風景であることもあれば、一見まったく関係のないような風景であることもあるだろう。〈故郷〉とは「人間が生育した一定の地域的環境という空間的概念があるだけでなく、人間がその中で「故郷にいるように」感じる生の秩序全体を、また、人間がなじんでいる生の連関によって包囲されて

いる全体の領域を、包括しているのである」²⁾とボルノウが述べるように、生まれた地域そのものに関わらず、人として共感し合えるような〈故郷〉の空間は存在すると考えられる。多地域の人が混在して暮らす今日の地域社会において、「故郷にいるように」感じる空間とはなにかを探ることは、地域の風景を持続させるための手がかりの一つとなると考える。

(2) 目的

以上の背景を踏まえた上で、本研究においては、人の意識的あるいは無意識的な空間把握とその意味を探ること、いわば空間体験の質的把握に取り組む。具体的には「なつかしさ」に着目し、その質の共通点と差異を明らかにすることを目的とする。なつかしさに着目する意義は以下の3点である。

1. なつかしいと感じることは、自分にとって近くにあると望むと願う何かの顕在化することである：「なつかしい」の語源は、「なつ(く)+かし(=願望)」であり、慣れ親しむ意味の動詞に願望の意味が付加されて形容詞化したものである。普段は忘れていたり、離れていたりしても、身近においておきたい何かへの気持ちに気づくことである。
2. 個人的背景によらず、なつかしさを想起する空間には共通する性質が見出せると考えられる：初めて行った場所に対してもなつかしさを抱くことがあるこ

とからわかるように、人がなつかしさを想起する場面において、思い出す記憶は個人的なものである一方、そのとき触れている空間は共通するものである。つまり、個人的背景によらず、なつかしさを想起する空間に何らかの共通する性質を見出せると考えられ、それが現代社会における「故郷にいるように」感じる空間の性質の手がかりとなる可能性がある。

- なつかしさは誰もが抱く感情であり、共感しやすい感情であるため、空間体験の抽出に適していると考えられる：なつかしさは人間の感情のひとつであり、その体験を誰もが語ることができる。また、なつかしさを語る時は情報を交換するという目的よりも、話者の感情を追体験する、話者の気持ちに共感する³⁾、という“確かめ合い”の行為が多く行われるため、質的な共通点を見出しやすいと考えられる。

2. 手法

(1)概要

グループインタビューを行い、なつかしさを空間体験に含まれる性質を抽出する。このインタビューは、統計的にデータを収集するのではなく、被験者によって発せられた言葉からなるべく忠実に体験に共通する基本構図を取り出し、現象の構図のパターンを抽出することを目的としている。従って、個人的な空間体験が被験者間でなるべく共有されることを狙い、会話を通して被験者同士が互いに“確かめ合う”ことを重視した。

上記のインタビュー実施から考察・結論に至る流れは以下の通りである。

- インタビューの実施。
- インタビューの会話からなつかしさを抽出。
- なつかしさを整理し、その構図をモデル化。
- なつかしさを性質について再現性を確認。
- 考察・結論の提示。

(2)インタビューの方法

インタビューは2013年7月8日に大学の一教室にて実施した。被験者は特定の大学の学生5名であり、それぞれ出身地は全員別である。統計データの収集ではなく、個人的背景の異なる人々の中で共有されやすいなつかしさをについて基礎的な考察を行うという目的の下、被験者を選定した。インタビューは筆者含む6名による自由会話形式を基本としたが、なつかしさをきっかけを最初の質問として尋ねることに留意した。一般になつかしさをきっかけは普段意識することが少なく、語られにくいと考えられるため、このような質問順序とした。

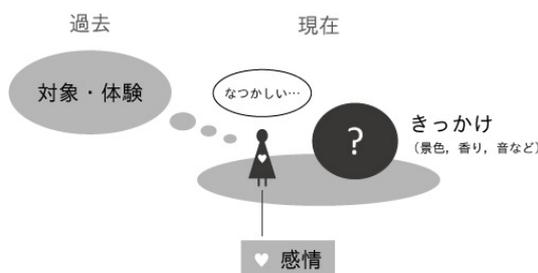


図-1 なつかしさをきっかけ・過去の体験・感情のイメージ

	きっかけ	体験	感情
例①	夕方、疲れて家に帰る帰り道	特になし	ほっとする、解放される、一日が終わった感じ
例②	野球少年を見たとき	野球をやっていた頃の自分	あこがれる、共感する

表-1 なつかしさをきっかけ・過去の体験・感情の例

(3)データの整理

録音した会話を書き起こし、会話データとして整理した。データからは「なつかしさを感じたきっかけ」・「なつかしく思い出す過去の体験」・「なつかしさを感じたときの感情」の3項目(図-1参照)を抽出し、1対1対1関係で対応させた表を作成した。表-1にその一例を示す。会話データから読み取れなかった項目については、後日個別にインタビューを行い、回答を得た。

3. なつかしさを性質

(1)抽出された性質

「なつかしさを感じたきっかけ」(事象①)・「なつかしく思い出す過去の体験」(事象②)・「なつかしさを感じたときの感情」(事象③)の3項目について、それぞれ抽象化した性質を抽出した。性質の一覧を表-2に示す。(各性質の詳細については、本研究で筆者らが実施した結果に基づいて、文献⁴⁾で詳しく解説しているため、本稿では省略することとする。)

a)きっかけの質

きっかけの質は、空間の様相が要因となる外発的性質と、過去の自分との関係が要因となる内発的性質に分類できた。後者に分類される「原初性」や「空間性」は、具体的な過去の体験との関連性を必ずしも持たない。

b)体験の質

体験の質は、特に具体的な記憶は伴わない「全体性」が顕著に現れた。思い出す時期は幼稚園～小学生の頃が大半であった。

c)感情の質

感情の質は、自己受容・他者受容感が特徴的であった。

ただし、多くの場合はそうした感情の動きとともに、「切なさ」（喪失感）を同時に抱えている。

表-2 なつかしきの性質

きっかけの性質		体験の性質		感情の性質		
外発的性質	空間	空間性（開領域性）	全体性（「あの頃」）	時の経過		
		眺望性	空間性	切なさ（喪失感）		
	時間	原初性	原初性	自己受容	自己による	帰郷感／「居場所」感
		時間性／季節性	時間性／季節性		他者による	憧れ
非日常性	非日常性	充足感			安心感／温かさ	
代理性	人（活動） 場所・もの	親和性（習慣性）	他者受容		共感	
内発的性質	親和性	共同性	幻想性			
	象徴性					
その他	閑寂性／孤独性					
	偶発性					

(2) 考察

体験の「全体性」により、きっかけの空間の重要性が示唆された。特にきっかけの外発的性質との関係の強さにより、なつかしさをデザインへ応用できる可能性が見出せた。また、感情に関してもきっかけ・体験との関係性が見受けられ、幾つかの型が抽出できると考えられる。

(3) 再現性の確認

別の被験者集団に対して同様のインタビューを行い、抽出した性質が再び現れるかを確認した。その結果、大半の性質を確認できたが、きっかけの「眺望性」と「原初性」、感情の「帰郷感／「居場所」感」は抽出されなかった。

4. なつかしきのモデル

(1) モデルによる表現事項

モデルで表現する事項は、身体（自己、他者）、身体が存在する空間、時間の流れ、事象、各事項の関係性である。これにより、なつかしさを感ずるとき、時間の経過に伴い、空間の中で主体の身体場が開領域へと変化することが説明できた。以下、モデルの例を示す。

(2) 基本モデル

基本モデルとして、①代理性起因モデル、②親和性起因モデル、③象徴性起因モデルの三種類に整理した。

図-2 は一般にイメージされるなつかしきのモデルの一つで、代理的存在を契機とするものである。

また、「だれもない地元の校庭を見たとき野球をやっていたことを思い出してなつかしい。校庭の砂をなら

した跡など、誰かが練習していた形跡を見ると特に感情移入する。本当に自分の原点だなあという感じ。」といった例は、過去に自分が馴染んでいた（かつ今は一定の距離を感じている）ものに対してなつかしさを感ずるといった構図の親和性起因モデルである。

象徴性起因モデルは親和性起因モデルと類似しているが、自分が過去になじんだ世界を象徴するものに遭遇することでなつかしさを感ずるというモデルである。この場合、象徴する対象は、地域のシンボリックなものや場所である場合と、個人的な生活世界を象徴するものである場合がある。

(2) 感情誘因モデル

なつかしきのモデルは、なつかしさを感じた時に誘因される感情の種類によって分類できる。以下、代表的なモデルについて解説する。

a) 「切なさ（喪失感）」誘因モデル

図-3 は、原初的感覚を契機として自己身体場が開領域となり、記憶の中の抽象化された感触によってなつかしさを感ずるモデルである。

b) 「帰郷感／「居場所」感」誘因モデル

「帰郷感／「居場所」感」は、＜故郷＞（居場所）や自分の「原点」と呼べる場所に回帰する感覚である。事象②における親和性と関係が強く、基本モデルに表れやすい感情である。

前述したような内発的性質によるものとは異なるモデルとして、事象①において“公”と“私”の空間的境界を感じたことをきっかけに「帰郷感／「居場所」感」を感ずる例がある。具体例とモデルを図-4に示す。

c) 「安心感／温かさ」誘因モデル

「安心感／温かさ」は、事象②における親和性・共同性と関係が強く、基本モデルに表れやすい感情である。

前述したような内発的性質によるものとは異なるモデルとして、外発的性質に起因する内-外の関係性を持つ空間性によって「安心感／温かさ」が誘因される例がある。具体例は主体が“内”にいる場合、主体が“外”にいる場合であり、それぞれ図-5、図-6 のモデルで示される。

d) 「幻想性」誘因モデル

事象②に非日常性が含まれるとき、ほぼ全ての事例で事象③に幻想性が含まれる。また、事象①には時間や季節の感覚が含まれる場合が多く、【事象①：時間性／季節性 - 事象②：非日常性 - 事象③：幻想性】という一つの構図を読み取ることができる。幻想性はその時間・季節感覚による空間の往復によって生じるものではないかと考えられ、これらは図-7のようなモデルで表される。

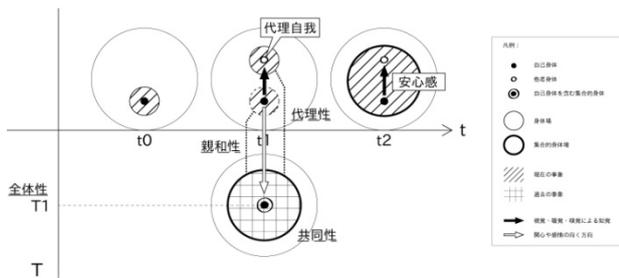


図-2 代理性起因モデル

具体例：「野球少年を見たときなつかしい。共感を覚える。」

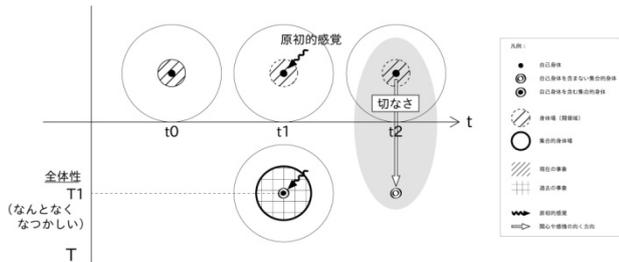


図-3 「切なさ(喪失感)」誘因モデル

具体例：「風が吹いて草のすれる音が聞こえたときなつかしい。思い出す特定のものはない。物悲しい、心が静まる感じ。」

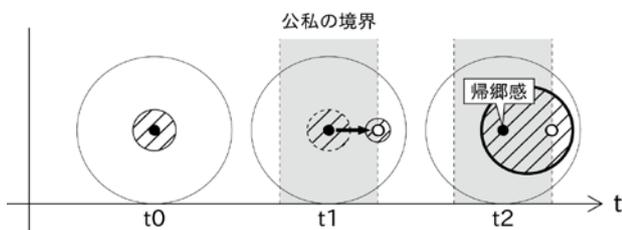


図-4 「帰郷感/「居場所」感」誘因モデル-空間性

具体例：「帰り道の踏切のところ。カーンカーンカーンという音。特に思い出すものはない。なじみある空間に帰ってきた安心感がある。」

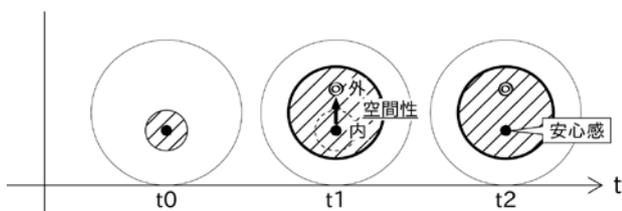


図-5 「安心感/温かさ」誘因モデル-空間性①

具体例：「雨の音を聞いたとき。朝起きて雨が屋根にぼとぼと落ちる音が聞こえたときなつかしさを感じる。特になにかを思い出すわけではないが、心が静まる。」

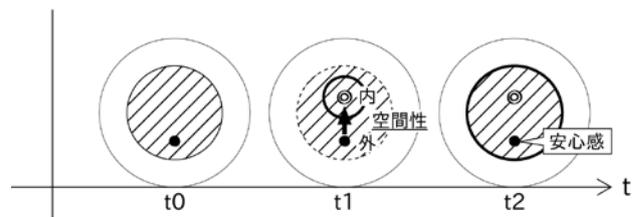


図-6 「安心感/温かさ」誘因モデル-空間性②

具体例：「夕方に、疲れて家に帰るとき、なつかしさを感じる。歩いている道は薄暗くて、ひんやりしている。道沿いの家の灯りが点きはじめていて、家の中は暖かそう。特になにかを思い出すわけではないが、ほっとする。」

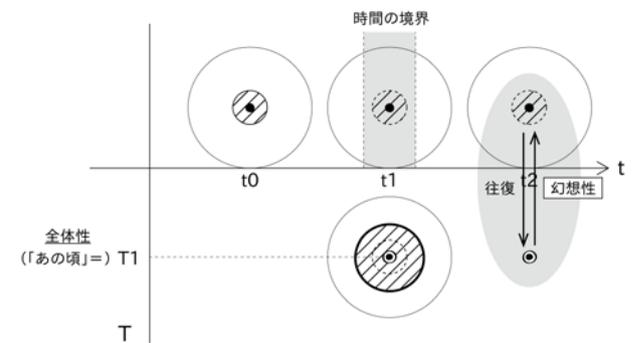


図-7 「幻想性」誘因モデル

具体例：「かなり静かな深夜に一人いるとき。いろいろやることを終えて、のんびりしている、あるいは寝ようとして寝転がっているときなつかしさを感じる。保育園の昼寝の時間に一人起きているという状態を思い出す。構図は、施設の真中にグラウンドがあって、その周りを各学年の部屋が取り巻いている。だいたい夏の真っ昼間で、日差しが強い。周りは寝静まって、妙にひっそりしている。自分がグラウンドにいることもあるが、暗い部屋で自分だけ眠れずに起きていて、カーテンの間から外で一人遊んでいる友達を見ているというパターンの方がよく思い出す。そして対照的に外は光で凄く眩しい。白昼夢の感覚に近い。かなりフワフワしている。」

5. 総合的考察

(1)世界の二重体験としての「なつかしさ」体験

4.にみたモデル化の結果から、「なつかしさ」体験とは、ある偶発的な出来事をきっかけに、時間と空間を媒介にして、自己と自己以外の何ものか(他者や社会、自然・空間世界)とのあいだに、「なつかしさ」体験以前とは異なる関係が新たに取り結ばれる(つながりが生まれる)「縁」の体験であり、これを通じて、主観的に体験される世界の二重体験であると捉えることができる。そしてこのとき、風景は、時空を媒介に、自己と他者・

社会、自己と自然（人間ならざるもの）とのあいだを取り結ぶ象徴的媒介として作用する。

(2) 「なつかしき」にみる風景・デザイン論の可能性

a) なつかしき主体のあり方

4. のモデル図で見たように、「なつかしき」体験を通じて自己身体場が開領域となることから、その主体は、他者や空間に対して関心を抱く、自己の周囲に広がる世界（空間・自然等環境や他者・社会）に配慮する主体であると言えるのではないだろうか。地域づくりにおける「風景が共同の関心事として立ち上がっていく」⁵⁾重要性を踏まえれば、「なつかしき」体験が持つ共通の質は、他者や社会とともに行動する主体の条件となり得る。

b) 体験の質を「確かめ合う」ことの意義と可能性

「なつかしき」体験の諸特質は、「親和性」「代理性」「原初性」「全体性（あの頃）」「共同性」「没頭性（集中感）」「自己受容」「他者受容」等、人が生きていく上で欠くことのできない重要な質として「なつかしい」（自分の近くにあってほしい）という感情とともに浮かび上がってきた。これらは、被験者同士でその質を共有することができた共通の特質であり、出身や知識の有無等に関わらず共通に理解できる特質である。

したがって、一般的には評価の難しい専門的な計画論や造形美等による判断ではなく、人として共有できる「体験の質」に根差しながら、これからの地域にとって望ましい姿（共通の関心事）を誰もが共感しつつ議論し、自分たちの手で導き出せるかもしれない。その上で、そのように導き出された体験の質に基づく重要な場所とそのあり方を、具体的な姿形としてどのように具現化していくかというデザイン上の課題が重要な課題として浮かび上がってくる。「なつかしき」体験に共通する諸特質を、出身や所属、世代等による立場の違いを超えてみんなで確かめ合い共有しつつ議論していくことができるとするならば、そのデザインにはもっと豊かな表現が認められてよいかもしれない。こうしたデザインの根拠の転回とその理論的基盤の形成が求められる。

c) 日本のデザインの再評価

“場所のゆらぎ”や“境界の意識”といった人間の存在を前提とした空間の諸特質がなつかしきにおいて重要であることが明らかになった。人の意識によって現れるゆらぎや境界における相互浸透的空間は日本的とも言えるものであり、日本のデザインの可能性を人間存在（主体のあり方）の側から再評価することにつながり得る。

6. 結論と課題

なつかしきとは、空間認識に対する意味の付与を現在の閉じられた自己以外から得ることであり、時間の経過に伴い自己-他者関係が変化していくということが説明できた。また、共有できる空間体験の質の存在を示した本手法は、質的研究の一手法として有用性が認められる。今後の課題は、第一に被験者数を増やし、研究結果の妥当性を高めることである。同時に、会話の進め方や被験者の選定といった手法の確立が目指される。

第二に、デザインへの応用に向け、外発的性質に関してヒアリングを深めたい。人の存在を前提とした日本的デザインの可能性を見出せた一方、「夕方の雰囲気」や「湿った感じ」等、考察の不足する事例が残っている。

最後に、幼少期の体験が特になつかしく思い出される意味について、さらなる考察が必要である。エリクソンのライフサイクル論⁶⁾は一つの手がかりとなるが、本研究では関連性を指摘するのみにとどまり、体験の質が持つ意味の考察には至らなかった。幼少期特有の自己-他者関係、自己の帰属意識、アイデンティティ獲得との関連性が一つの着眼点となると考えられる。

参考文献

- 1) オットー・フリードリッヒ・ボルノウ著、大塚栄一他訳：『人間と空間』、せりか書房、1978
- 2) オットー・フリードリッヒ・ボルノウ著、須田秀幸訳：『実存主義克服の問題：新しい被護性』、未来社、pp. 227-228, 1969
- 3) 仲谷美江：「思い出を語る - 共感コミュニケーションの場構築に向けて -」、電子情報通信学会技術研究報告、ヒューマンコミュニケーション基礎 103(742), pp. 7-12, 2004
- 4) 山田圭二郎、西研：風景の人間の意味を考える - 「なつかしき」を手がかりに、中村良夫・鳥越皓之・早稲田大学公共政策研究所編：『風景とローカル・ガバナンス - 春の小川はなぜ失われたのか』、pp. 211-244, 早稲田大学出版部、2014
- 5) 西研東京医科大学教授（社会哲学）：シンポジウム『風景とローカルガバナンスを問う』（2013年11月23日）での発言・配布資料より。
- 6) E.H. エリクソン著、西平直訳：『アイデンティティとライフ・サイクル』、誠信書房、2011